二　待ちぼうけ

来る。来ない。来る。来ない。僕は待っている。ひたすら待っている。もう何本の銀河列車が新地球に向かって出発したことだろうか。僕は、そのたびに髪の毛を一本ずつ抜いて、その髪の毛を足下に落とす。最初のうちは、それは、筋のように見えたけれど、次第に川のようになり、山のように盛り上がっていく。その間にも、銀河列車は駅に到着すると、人々を車両に積み込み、定時が来ると、出発していった。

僕の乗る銀河列車は午後五時出発だった。それなのに、僕は十二時間も前から、駅に来て、列車を待っているのだ。僕は、待合用のベンチに座り、人々が慌ただしく列車に乗り込んでいく様子を他人ごとのように眺めていた。

喉が渇いた。僕は立ち上がり、自動販売機の前に立つ。財布から小銭を取り出すと、募金箱のようにお金を投入する。省エネモードだった画面が明るくなった。

「お好きなものをお選びください」

自動販売機が、何十万回も、いや何百万回も言いくたびれたセリフをしゃべった。もちろん、僕の方も、何十万回も、いや何百万回も聞き飽きたセリフを耳にした。

僕は、赤く光っている画面に魅入る。ほとんどが売り切れ表示だ。列車に乗る前に、乗客たちが買いだめでもしたんだろう。高速の銀河列車に乗っても、新地球までは一週間はかかるらしい。列車に乗っている間は、朝昼晩の三食の食事が提供されるし、飲み物も必要に応じて、飲めるらしい。それでも、人々は過度に不安を感じて、自分専用の飲み物を余分に購入して、自分のバッグなどに保管するのだった。そのため、この駅の構内にある自動販売機も売り切れ状態だった。

本来ならば、業者は売り切れの自動販売機に商品を充填すべきなのだが、もう、心も商売っ気も地球にあらず、新地球にあるのか、商品を売るつもりはないようだ。また、お客が商品の代金を投入するものの、そのお金も回収するつもりもないようである。このまま、自動販売機内の売上金は地球と共に消えてしまうのだろうか。

僕は、プラットホームを歩き回って、売り切れでない、つまり、売れ残った缶ジュースなどを探して歩いた。一台、二台、三台、四台。全て売り切れのランプが点いていた。どうせ、商品を充填しないのだったら、電源を落とした方が省エネになるのに、と思いながらも、その電気代も、電力会社の職員のほとんどが新地球に移動している状況なので、もう電気代も請求しないだろう。そうなると、省エネする意味はないのか。

僕は、駅構内の全ての自動販売機を探した、だが、全てが売り切れの赤いランプが点灯していた。一台もないのか、と、僕が飲み物を購入するのを諦めようとした時、プラットホームの一番奥の自動販売機に赤いランプが点いていないように見える箇所があった。僕は、プラットホームで列車を待つ他の客に気付かれないように、はやる気持ちを押さえて、いかにも時間を持て余し、ついでに散歩をしているようなふりをして、その自動販売機に近づいた。

だけど、いきなり自動販売機は見ない。プラットホームの先端まで歩き、線路を眺め、この線路の先に、新地球があるのだと期待するふりをして、すぐに飛び立てないのを残念がっているように見せながら、ちらっと自動販売機を見る。商品のサンプルは横に八個、縦に三個、計二十四個分が並んでいた。

上から順に、右から左に、商品を眺めていく。だが、全てのボタンが赤く点灯している。やはり売り切れか、とあきらめかけた時、最後の、つまり、二十四番目の商品のボタンだけが赤いランプは消えていた。つまり、在庫が残っているということだ。

辺りを見回す。誰も近くにはいない。ここから一番遠いプラットホームに人だかりが見える。何をしているのだろう。とにかく今は、自動販売機のジュースを購入するのが先決だ。その後で、ゆっくりと確認に行こう。

僕は、待ちくたびれたふりをして、その自動販売機に近づいた。横に立つ。スイッチのボタンを隠す。遠目にはぼんやりと佇んでいるように見えるだけのはずだ。財布から小銭を取り出す。どうせ、この小銭も自動販売機に入ったままで、誰も取り出すことはないと思いながら、投入口に入れた。

ガタン。下の取り出し口に缶が落ちてきた。と、同時に、ボタンに赤いランプが点灯した。最後の一本だったのだ。立ち疲れて座るふりをしながら、取り出し口に左手を伸ばす。温かい。いや、熱い。取り出し口で一度、誤って落としてしまう。

だが、ここでプラットホームに落として、転がしてしまうと缶ジュースを購入したことが列車を待っている他の人にわかってしまう。熱いのを我慢しながら手に取ると、すぐさまＴシャツの裾の部分を伸ばし、カンガルーのお腹の袋のようにして抱きかかえる。銀河列車を待っている人からできるだけ離れて、プラットホームの端に進む。

ようやく、缶ジュースを見た。Ｍ会社の甘酒だった。まさか、甘酒とは思ってもいなかった。飲み物であれば何でもよかったけれど、まさか、甘酒とは。少し、大袈裟だが、これが、地球上の最後の自動販売機の缶ジュースなのか。そう思うと、感慨も一層、深くなる。

　このまま、新地球に持っていくべきか、それとも、ここのプラットホーム、つまり、この地球で飲んでしまうべきなのか、判断に迷う。もし、新地球に持参すれば、自動販売機の最後の缶ジュースとしてプレミアムが付き、高値で売れるかもしれない。そのためには、証拠が必要だ。

　僕は、スマホを取り出すと、赤いランプが全て点いた自動販売機の前に、甘酒の缶を置き、カメラモードにして、カメラの絵のボタンを押した。カシャ。写真撮影が終了した。再度、確認する。画面には、売り切れランプの前にある甘酒の缶が映っていた。

　この写真を見た人は、確かに、この自動販売機の最後の缶ジュースだと言えるかもしれないが（他のところから持参した缶ジュースではないかと疑問を呈される可能性はある）、だけど、この甘酒が、地球上で最後の自動販売の甘酒の缶であるとの証明にはならない。

　もういいや。喉も乾いているし、それなら飲んでしまえ。やけ酒ではなく、甘酒のプルタブを引っ張る。まだ、缶は熱い。一口、飲む。ぬるい。外側の缶は熱いままなのに、意外にも、中身は熱くない。中の熱さを外の缶が奪ったかのようだ。

　うまい。そう言えば、ここ数年、いや、十年以上、甘酒なんか飲んだことがなかった。最後に飲んだのはいつだったのだろうか。そうだ。家族で、近所の神社に、初詣に行ったときに、お参りが終わった後、「お休みしませんか。ぜんざいや甘酒をお出ししますよ」というお接待の甘い言葉に誘われた時以来だ。

　これまで、父は、そうした誘いを断ってきたはずなのに、その時だけはどういうわけか、「縁起物だから」と休憩所の扉を開けた。僕を始め、家族は互いに顔を見合わせながら、父の背中に続いた。

「何にしますか？」と地元の有志のお接待のおばさんの言葉に、家族みんなが「ぜんざい」と答えるのに、自分一人だけ「甘酒」と言った。

「大丈夫か？」「飲めるの？」と家族からの心配に、「大丈夫」と答え、出された茶碗の白くて、粒々の液に口を付けたのだった。

　甘い思い出に浸っているうちに、そろそろ、銀河列車の出発の時間じゃないかと時計を見た。ええ。出発時間が過ぎている。僕は、胸ポケットから乗車券を取り出した。出発時間を確認する。午後五時だ。時計は、午後五時五分だ。だけど、目の前には列車は到着していない。到着していないのに、出発しようがないではないか。新地球から地球に折り返しの便が遅れているのか。

確かに、他のホームを見ると、どこにも列車は到着していない。それでも、不安になった僕は、改札口に走って行って、駅員に尋ねた。

「午後五時発の銀河列車は、まだ、出発していないのですか」

　駅員は怪訝な顔で、「五分前に出発しましたよ」と答えた。僕の頭の中は真っ白になって、その中を、銀河列車が時計回りにぐるぐると回転し続けている。

「だって、ホームに列車は到着していないじゃないですか」

　僕は、駅員に食って掛かる。口から、白い甘酒の粒が飛んだ。駅員は、さっとそれをかわすと、僕のような客は、これまでにも何万人も、何十万人も対応してきたかのように、「銀河列車の発車は、ここのホームではなく、向こう側の一番端のホームですよ」と、指さし呼称のように、顔を向けた。僕も、それと同じ方向に顔をさした。

　そこは、さっき、僕が自動販売機で甘酒を買おうとしていた時、人だかりが見えた場所だった。その人だかりが気になっていたものの、自分の世界に浸っていたために、列車の出発だとは思わなかったのだ。

　僕の顔は、温かく、かつ、アルコールの成分は入ってはいないものの、お酒という名前だけで、赤くなっていたが、冷めていく外側の缶の温度と、甘酒の白い粒々の影響を受けてか、白く、そして、皮膚の静脈が浮き出たように、青くなっていった。

　駅員は、僕の持っている甘酒の缶を一瞥すると

「まあ、地球を離れるに際して、センチメンタルになり過ぎて、列車に乗り遅れるお客さんもたまにはいるんですよ。そう言ったお客さんのために、ちょうど十二時、いわゆる零時ですけど、私たち駅員も乗車する最終便があるんです。後、七時間後ですが、それまでの間、申し訳ないですが、待っていてください。ただし、それに乗り遅れると、自動販売機や缶ジュースとととともに、この地球に残ることになりますけど・・・」

　僕は、列車を待ちすぎて、甘酒の甘いに匂いと共に、待ちボケしたことに気付いたのだった。